

ユスト高山右近の生涯と信仰

94

右近最後の戦

秀吉の亡き後、徳川家康の独走が日ごとに激しくなつてゆくと、秀吉の遺した子、秀頼を擁護する石田三成や小西行長らが、家康の横暴に対し怒りを燃やしました。そんな三成を家康は巧みに戦へと誘い出しました。

慶長5(1600)年6月27日、家康は会津の上杉景勝に謀反の動きがあるとして、福島正則や細川忠興など豊臣家に恩のある諸大名と会津を目指し、伏見の城を出発しました。これを好機ととらえた三成が、7月17日、ついに立ち上がりました。

えるような戦いが起きます。越前・加賀の各大名が、家康方の東軍につくか、三成方の西軍につくかを明らかにする戦いでもありました。ほとんどの大名が西軍につくなか、前田利長の母を徳川家に人質として差し出している前田家は、東軍を表明します。利長は、秀吉のもとで幾多の戦いを共にしてきた同僚の大名たちと袂を分かちつ形で戦に突入してゆくことになりました。

7月26日、48歳になった高山右近を軍奉行とする総勢二万五千の前田軍は、西に向かいました。陣営にて、利長は小松城の丹羽長重を倒すと言いました。右近は小松城より大聖寺城の山口玄蕃を討つことを進言しました。

利長は、一瞬不快な表情を見せましたが、小松城を素通りして、現在の石川県と福井県の県境にある大聖寺城への進軍を命じました。8月3日明け方、大聖寺城に総攻撃をかけた前田軍は、1200ほどの兵力で迎え撃つ山口軍を、圧倒的な戦力差でその日の夕刻には攻め落としました。右近の読みが当たりました。人びとは右近の思慮深さに「さすが老巧なり」と称賛しました。

を一身に引き受けたのでした。9月15日、時代は天下分け目の関ヶ原合戦へと突入してゆきました。日本全土の大名が、東軍と西軍に分かれて激突しました。午前8時に始まった戦いは、一進一退が続くなか、西軍の小早川秀秋の寝返りによって一気に東軍が優勢になり、関ヶ原にはたくさんの屍が横たわっていました。

結局、右近の加わっていた前田軍は、北陸での戦の後、関ヶ原の地を踏むことはありませんでした。しかし、東軍についていたことで、83万5000石から、119万5000石の大名へと登り詰まりました。ここに加賀百万石の礎が誕生したのです。前田家における右近の立場はより強固になりましたが、北陸での負け戦以降、右近が戦場に赴くことはありませんでした。

「カテキズムの学び」

第26回 非暴力か暴力か

新型コロナウイルス感染拡大にともなう緊急事態宣言が解除されたのを受け、6月からサクラファミリアでの講座を再開しました。ライブ配信を同時に行いながらのいわゆるハイブリッド方式で実施。周知期間が短かったこともあり会場に足を運ばれたのは10名ほどでしたが、ライブ配信の方は120名ほどの方が視聴してくださいました。

さて、勉強した箇所は十戒の第四のおきて「あなたの父母を敬え」の箇所でした。両親を尊重するというだけでなく、家族という基本的構造における人間関係の大切さが述べられています。

他方、家族内だけでなく、いわゆる公権力とどのように向き合うべきかについても言及されていて、講座当日の質問でもこの点を取り上げられました。カテキズムでは

権威に服する人々は上に立つ者を、神がご自分のたまもの奉仕者として定められた神の代理者とみなすべきです。(2238番)

と述べている一方で、

国民には、為政者の命令が道徳や基本的人権、もしくは福音の教えに反する場合、これを拒否する良心上の義務があります。(2242番)

とも述べています。さらには、以下の5つの条件を満たせば「政府の抑圧に対する抵抗行為のために武器を用いる」(2243番)ことも容認しているのです。

- ①基本的人権が間違いなく、強く、永続的に侵害を受けている場合。
- ②最後の手段であること。
- ③現状よりも大きな害を起こさないこと。
- ④成功するという希望には根拠があること。
- ⑤武力に訴える以外にはよい解決法が良識的に見つからないこと。(同)

世界のいくつかの国においては、今まさにこのような状況に陥っていると言えるところもあり、現場ではとても難しい判断を迫られていることでしょう。カテキズムの学習(次回8月26日)では、第五のおきて「殺してはならない」を扱う中で、暴力と非暴力についてさらに学びを深めていきます。

(文 酒井俊弘補佐司教)

訃報

フランス内山恵介神父(御受難修道念は、6月17日、肺炎のため北九州市内の病院にて帰天。84歳。神奈川県厚木市出身。



塚ならびに福岡黙想の家に黙想指導に奉仕した。聖母マリアへの崇敬と伝統的信仰心への回帰に熱心に取り組み、また心に重荷を担う人々に親身に寄り添い、癒しと回心へと導いた。

1974年司祭叙階。シカゴCTU(カトリック合同神学院)の留学などを経て浦和教会(さいたま教区)助任、日生中央教会主任などを歴任した。その後、宝楽教諭として奉職し、その



1962年の初誓願後、大阪・久留米・熊本信愛女学院の中学高校において音楽を学んだ。86年から95年まで、静かに御父のみもとに旅立った。

「アフリカ」難民移住者

戦災孤児たちの30年後に遭遇する

「保護者・同伴者のいない難民のこどもは特別に配慮せよ」これはUNHCRの難民調査教本にある一文です。

すると、彼は入管職員だけでなく身近な人までを攻撃するので支援者は皆離れてしまいました。

今年6月、私はモハマドさんとともに入国管理局へ立ち会い、彼に代わって難民調査官に問いました。「30年間アフガニスタンへ一度も帰らずトラウマを抱えるモハマドさんを送還可能と判断した根拠は何ですか」

「総合的に判断により」「家族のいないモハマドさんは本国で生きられませんか」「総合的ではなく」



起こします。意識が混乱した。戦時トラウマを抱える彼は、強制退去を前提とした入管への出頭時には度々パニックを引き起こします。意識が混乱

ベトナム人のビンさんは軽犯罪を繰り返す人で、少年の頃に大人に紛れて小舟に乗りベトナムを脱

判断により」「家族のいないモハマドさんは本国で生きられませんか」「総合的ではなく」

「戦災孤児」のままだま人生を終えてはならない、私たちはただそれだけを祈っています(文 シナピス事務局 ビスカルド篤子)

カトリック墓地 納骨堂・納骨所 使用者募集

大阪教区の信者のみがお申込みいただけます。詳細は大阪教区本部事務局管理課 竹中までお問い合わせください。06-6941-9705

